

名古屋の音楽文化と若者社会

岩瀬 ※※※

※※※ IWASE

中京大学現代社会学部現代社会学科
学籍番号 C11.....

1. はじめに：研究主題（私の関心）

私は、音楽鑑賞が趣味であり、中学生の頃から好きなアーティストやバンドのコンサートやライブ、ロックフェスティバルに参加していて、現在もその趣味は続いている。私自身音楽が好きだということが一番の理由であるが、それを自分が育った地域で限定して見てみることで、その中で動く人間の深い所が分かるのではないかと思い、愛知県（特に名古屋を中心とする）での音楽文化がどのようなものか、を研究することにした。

名古屋を研究対象にした理由は前に述べたように、自分が育った地域が愛知県であることが一番の理由である。しかし、名古屋にはこの地方にしか存在しない特徴や特有があるものを持った文化が存在すると思う。関東や関西の大都会でもないが、名古屋の都心に行けばある程度の都会らしさを感じる。そんな、この地域に密着することで、『名古屋らしさ』を表現することのできる名古屋の社会像＝人間像が見えるのではないかと考えた。

また、文化は若者の流行により作られる。ましてや、音楽は若者には必需品ともいえる。『名古屋的』な音楽文化からは、若者の社会像＝人間像を見ることにもつながるのではないかと考えている。

2. 音楽と流行の関係史

まずは、地域に限らずに、人々と音楽の関わり方について考察する。音楽が好きな若者は、どのようにして自分の周りのヒット曲を知るのだろうか。

ヒット曲の生まれる出所は、テレビCM、ドラマ、次いでFM、有線、歌番組と続く。これに男女でのパターンの違いはあまり見られないが、男性よりも女性のほうがテレビと回答する率が高い。男性は六割弱であるのに対し、女性は七割弱が回答している。女性のほうがヒット曲の初期接触における強いテレビ志向が表れている。ヒット曲のようなスピードの速い不定期な流行は、新聞やラジオといったメディアよりもAVメディアであるテレビの影響力が大きいと言える。

ヒット曲は流行の代表的形態のひとつである。テレビの登場から1980年代頃までは、ヒット曲は歌番組と密な関係にあった。驚異的な視聴率を誇り、国民的年中行事と言われたNHKの紅白歌合戦に象徴されるような歌番組が、当時のヒット曲を受け手の人々に伝えたのである。

オリコンのシングルヒットチャートの始まった1968年当時は、さまざまなジャンルの音楽が入り混じった状況であった。また、当時のシングルレコードの購買層も、現在のヒットチャートにあるような若者志向的な音楽中心のヒットチャートではなく、あらゆる世代にわたっていた。

1980年代に入ると、アイドル、ポップス、ニューミュージックの融合の時代がやってくる。テレビ番組から生まれたア

アイドルが人気になり、音楽の流行は女子高生や若者の若年層へ移行し始めた。また、1982年にはCDが登場し、流行としての音楽に大きな影響を与えることになる。

1990年代に入って、CDの普及が、ヒット曲の構造そのものを大きく変え始めた。CDはシングルレコードの倍の情報量が収録できるために、音声のない「カラオケバージョン」の曲を収録することができるようになった。このことが、カラオケブームを一段と煽り、相乗効果としてCD購入の拡大へとつながった。また、パッケージメディアであるCDは、小型かした手軽さと澄んだデジタル音声の魅力、耐久性の高さなどにより一気に広まっていった。80年代から90年代にかけて、テレビの人気ドラマとCMタイアップ、カラオケ人気との連動、アーティスト志向などのいくつかの要因が、ヒット曲を生み出した。テレビというメディアがいかに流行現象を生み出しているかが分かる。

2000年代に入ると携帯電話やパソコンの普及による、ネットワークを通じての音楽配信が始まった。配信専門のレーベルを作ったレコード会社もある。音楽配信という形では、CDよりも低コストで音楽をより多くの人に触れさせることができる。新曲を配信限定で行ってから、ユーザーの反応の良かったものだけをCD化するレコード会社もある。音楽配信はレコード会社側の新しいビジネスでもある。

また、ipodやソニーウォークマンの登場によって音楽を「いつでも、身近にあって持ちあるける」ことが可能になった。さらに、レンタルショップで低価格でその音楽が手に入れられる。

音楽という「情報」を手に入れただけなら、確かにダウンロードやレンタルショップでレンタルするほうが手軽であるし低価格だ。これが今現在のいわゆる「CDが売れない時代」だと言われる理由であるのではないか。だが、CDという「形」を残しておきたいという人もいる。CDショップをぐるぐると巡り、気に入ったCDをプレーヤーにセットし、歌詞カードを見ながら音楽にゆったりと浸る。そんな行程も良いと思うし、決して無くなったわけではない。いい音質でジャケット、スリーブ、ケースがそろっていないと嫌だ、というユーザーがいる限り、CDは無くならないだろう。

3. ロックフェスティバル—日本全国と名古屋

ここでは、日本のポピュラー音楽を語る上で避けることのできないロックフェスティバルについて述べる。私自身がロックフェスティバル好きであるし、私自身が過去に足を運んだことのあるライブ・コンサートの中でも、半数近くがロックフェスティバルである。今回ここでロックフェスティバルを取り上げる理由としても、私自身の参加率が多いことも理由と言える。何回も参加したくなるその魅力について考える。また、ここでは名古屋圏でのロックフェスティバルの特徴と傾向を取り上げ比較するために、まず日本全国で行われる代表的なロックフェスティバルについて考える。

(1) 日本におけるロックフェスティバル

日本におけるロックフェスティバルは、1997年山梨県の富士天神山スキー場で行われたフジロックフェスティバルが最初である。海外で行われる「ロックの祭典」を日本でも行いたいという関係者の願望から生まれた。しかし、その当時は日本で行うことは夢のような話だったという。第一回目の開催は、台風が直撃し、二日間にわたって行われたイベントだったが、一日目は雨が降り、二日目は影響が強く中止せざるをえなくなった。第一回目が悲惨な結果になってしまったのである。

ロックフェスティバルの大半は野外で長時間にわたって行われることが多い。天候の変化や気温の変化も予想される。そういった変化に対応できるよう、防寒具やカッパ、帽子、そして十分な水分補給が大事であるが、第一回目に訪れた観客で、そういった対策をとって参加していた客は少なかった。舞台と観客の間の空間の舞台前は、ペットボトルや携帯電話、財布、ゴミなどで溢れかえていたという。混乱した状態で、けが人も続出した。二日目のフジロックフェスティバルはこのような大混乱から中止になり、翌年の開催も危ぶまれたが、翌年の第二回は同じ場所という危険を回避するためもあり、山梨県から東京都の豊洲ベイサイドスクエアに場所を移しての開催となった。第三回は、やはり自然の中でゆったりと音楽に触れる雰囲気を作りたいとの関係者からの願望から、新潟県の苗場スキー場での開催となった。こうしてフジロックフェスティバルは安定の道のりをたどることとなる。

現在に行われるロックフェスティバルでは、第一回目のような悲惨なトラブルは、私が参加している限りでもあまり見られないし、大きなニュースになったこともあまり耳にしない。観客のマナーとフェスに対する学習能力と、フェス側の実践が成長し安定しているのだと思う。それゆえに、全国各地でロックフェスティバルを開催することが可能になったのではないか。

現在日本で行われるロックフェスティバルの代表的なものと言えば、すでに記述した、フジロックフェスティバル、1999年に始まったライジングサンロックフェスティバルインエゾ、2000年に始まったサマーソニック、ロックインジャパンフェスティバルである。これらは四大ロックフェスティバルと呼ばれる。

ライジングサンロックフェスティバルは邦楽系ロックフェスティバルの先駆けとなった。ロックインジャパンフェスティバルは、ロッキング・オンが企画制作するフェスティバルである。ロッキング・オンはこの他にも冬の年末に行うカウントダウン・ジャパンや、2010年から始まった新しいフェスティバルとして、ジャパン・ジャムなどの他のロックフェスティバルを企画している。ジャパン・ジャムは、単独公演のライブ・コンサートでは決して見る事の出来ない、アーティスト同士のジャムセッションを主体としたフェスティバルである。ロックフェスティバルの持つ特徴として、計百組、二百組のアーティストが出演する。それらをすべて見尽くすことは物理的にも不可能である。それを自分で選択して計画を立てながら見るのがフェスの醍醐味と言えるだろう。ジャムセッション式のライブは、ひとつのアーティストの持つ曲を、他のアーティストがかわるがわるで登場し演奏するといったものである。これは、既存のロックフェスティバルよりも、たくさんのアーティストを見ることが可能になっているのではないだろうか。私は、第一回目のジャパン・ジャムに二日間参加した。それ以前に参加したロックフェスティバルよりもやはり違うという印象を受けた。だが、フェス特有のお祭り感の雰囲気はもちろん残っている。このように新しい形式のロックフェスティバルが企画され、生み出されているといえる。

サマーソニックは、フジロックフェスティバルの後発フェスとして、否応なしに比較される宿命を負っていた。サマーソニックらしさと言えば、「都市型フェス」と言えるところであろう。フジロックのように自然の中で行われたいことは、来場者が事前に宿泊先や交通の手配をする必要がなく、気軽に足を運べるという利点がある。しかし、その点は気軽に足を運べるからこそ、運んでみたいと思わせる出演アーティストのラインナップの充実が重要といえる。

これまでに挙げた四代ロックフェスティバルの特徴を考えると、フェス独特のお祭りの雰囲気、出演アーティストのラインナップがその魅力だと言えるのではないか。だが、日本各地で行われるこれらのどのフェスティバルにもすべて参加できるわけではない。より行きたいと思わせる、他にはないと思わせる魅力と特徴は音楽ファンにどこで判断されるのだろうか。

(2) 名古屋におけるロックフェスティバル

名古屋のロックフェスティバルといえば、TREASURE05X が代表的であろう。既述したような日本を代表するロックフェスティバルは一日に多数のステージでライブを同時進行して行すが、この TREASURE05X は多数の日程に渡り、多数の場所で開催される。それらのライブを総称して「TREASURE05X」と呼ぶのである。このフェスティバルは2004年から始まった。当初は「TREASURE」「TREASURE052」と呼ばれていたが、「052」の名古屋だけを表すのではなく、他の東海地方の会場でも開催されることから「05X」として名古屋だけでなく地域的にも、規模的にも広い意味を持つようにしている。2008年公演では、9会場13公演にも渡る規模の大きさを見せている。出演アーティストは、地元名古屋を中心に活動するアーティストから日本を代表するロックフェスティバル、つまり既述したようなロックフェスティバルにも数々出演するアーティストまで様々である。この「TREASURE05X」で特徴的なのはこの公演数の多さであるが、この公演数の多さから、音楽の系統のジャンルが似ている公演を三公演ほど合わせて、それらが一枚のチケットで見ることができる通し券も発売している。通し券はそれぞれの公演のチケットをバラバラで買うよりもはるかに安い値段で買うことができる。この通し券には日本を代表するロックフェスティバルに出演するアーティストをラインナップした公演も含まれている。参加者は、日程を考えて、すべて行くことができるならばかなり得になるのではないだろうか。また、この多数の日程と多数の場所で行われるということは、参加者が公演自体を選択することができる。日程の問題で言えば、都合で行けなくても他の日程の公演がある。音楽ジャンルで言えば、例えば激しいパンクロックのライブは苦手、という人は2006年の今池 TOKUZO で行われたような、ゆったりとした音楽を奏でるアーティストを聴ける環境のライブがある。また、TREASURE05X のライブはパンクロックだけではない。ヒップホップの音楽を聴いてクラブで踊りたいという人には2007年の OZON&SPIRAL で行われたようなライブがある。もちろん、ライブハウスだけではなくスタジアムや野外リゾート地で行う大型公演もある。これは、「4大ロックフェスティバル」に出演するようなアーティストが名古屋に集まるフェスティバルとして、2009年を除くが、ほとんどの年で最終公演として行っている。開催時期も、夏休みの最後に行われるので夏の終わりを感じながらライブに浸ることができる。実際に出演アーティストも、この「夏フェス」が今季最後に出演する「夏フェス」だというアーティストも多い。

このように、TREASURE05X は多数の日程と会場を用意し、名古屋の音楽ファンに幅広く楽しんでもらえるように組まれているのである。日本を代表する「四大ロックフェスティバル」ではその日のうちにお目当てのアーティストが出ない、または少ない場合もあるだろう。フェスの雰囲気が好きだから、アーティストのラインナップに関わらず参加するという人もいるだろうが、長年にかけてフェスに通っていないと、その雰囲気は理解できないものだと思う。しかし、この TREASURE05X では、日程的にも音楽ジャンルの的にも自分の気に入ったライブを楽しむことができる。言わば、自分のベストのライブが見られるチャ

ンスでもあるのだ。

なぜ、このようなライブが企画されたのだろうか。企画しているのは東海地方のコンサートや各種イベントを企画し、チケット管理を行うコンサートプロモーター会社のサンデーフォークである。また、東海地方に音楽イベントが少なかった頃に、幅広く音楽を楽しんでもらえるようにしたのではないだろうか。

名古屋のロックフェスティバルイベントとして、TREASURE05Xにつき、SAKAE SP-RINGがある。SAKAE SP-RINGは、2006年から始まった。地元のFM局ZIP-FMが主催している。その名の通り、名古屋・栄を中心とし、5月、6月に開催され、ライブハウスやクラブを多数の会場を使って行われるライブサーキットイベントだ。ライブサーキットとは、アメリカ・テキサス州で行われる「SXSW(サウスバイ・サウスエスト)」に端を発したもので、日本では大阪のFM局FM802が主催する「MINAMI WHEEL(ミナミホイール)」が国内最大規模となる。近隣のライブハウスやクラブを貸しきって、同時多発的に行われるライブを楽しむ。場所と場所をハシゴしていくうちに地域との出会いや音楽ファン同士の出会いがあるのではないかと。

このイベントは、まさに地元で話題となっている音楽を生でチェックにしに行けるところが魅力である。発案者は、2004年あたりから名古屋市中区あたりでライブサーキットイベントをやりたいと考えていた。しかし、会社からのOKはなかなか出なかった。発案者の友人で雑誌編集者と当時レコード会社に勤めていた人とで盛り上がったところから、具体案を練り、2006年5月に開催ができたという。また、地元ラジオ局が主催しているところは大きい。ラジオで音楽を伝えるだけでなく、ZIP-FMが推す地元アーティストやバンドを実際に外に出していくことで、イベント自体のファンも生まれていく。ZIP-FMとしての広告塔ともなるイベントである。参加者とアーティスト・バンドをラジオ局がつなぎ、さらに地域とのつながりも産み出している。ZIP-FMのサテライトスタジオを設けている名古屋・栄の商業施設ビル「ラシック」が後援しているのも、また地域に密着していると言えるのではないかと。

私自身も、2011年6月に開催されたこのイベントに参加した。二日間開催されたが、両日とも参加した。気になるバンドは多くいたが、特別にお目当てのバンドがいるわけではなかった。それでも、気になるバンドが少しの時間でも沢山見ることができるとこのイベントの良さだと思う。ライブを実際に見てから、そのバンドの印象が付き、お気に入りのバンドを発見できるチャンスでもある。SAKAE SP-RINGには地元名古屋を中心に活動するバンドが多く出演するが、もちろん全国的に有名なバンドも多く出演する。そのようなバンドはやはり広めの会場が使われる。地元を中心に活動するバンドでは、地元のファンも多く、出演者ものびのびとライブをしているといった印象を受けた。

また、地域とのつながりを感じた点は、このイベントの間に会った人やお店の人との会話が生まれたことであると思う。近隣のライブハウスを回るので、その間に多くの人とお店の人とすれ違う。通常のロックフェスティバルでは入場のサインと再入場の際に必要なリストバンドを腕につけるが、SAKAE SP-RINGでは首からかけるパスが入場のサインとなる。そのパスをかけているだけで、『SAKAE SP-RINGに参加している人』とすぐに分かることができるのである。知らない人であっても、仲間意識が生まれた。また、それをつけたままお店に入ると、『今日は何かのイベントですか?』と話かけられることもあった。これらの経験から、その時は、栄の街が一体となっている気がした。

名古屋で行われるロックフェスティバル・ライブイベントの2つを取り上げたが、まだまだこの地域でのロックフェスティバルは存在する。名古屋市長区の大高緑地公園で7月に行われる入場無料の「FREEDOM NAGOYA」や、開催地を愛知県に広げると、西尾市吉良町の三河湾リゾートリンクスで5月に自然の中で行われる「Rock on the Rock」、南知多町南国リゾートアジアでゴールデンウィークに海辺で行われる「seapus」、豊田市豊田スタジアムのイベント広場・千石公園で10月に行われる「TOYOTA ROCK FESTIVAL」などがある。各地で行われるフェスティバルそれぞれの『色』を形づくっていくことが大事だと思う。

(3) ～杯ブリットフェス～「Seapus」からみる名古屋のインディーズシーン

この地域で開催されるロックフェスティバルはまだ掘深めていく点がたくさんあると述べた。それぞれのフェスが持つ『色』や特色は何なのか知りたいと思い、私は、2012年5月3、4に愛知県南知多町南国リゾートアジアで開催された～杯ブリットフェス～「Seapus」にボランティアスタッフとして参加した。このフェスティバルに参加した理由としては他に、今までお客さんとして来場して楽しんでたロックフェスティバルに、フェスを作る側として参加することでロックフェスティバルを一から作りあげていく所を見ることが出来たり、経営の仕方を見ることが出来たりなど、もの見方が変わるのではないかと。また、名古屋のインディーズバンドが集まるこのフェスティバルには、今まで私が見てきたものとは違う特徴があるのではないかと考えたことである。

～杯ブリットフェス～「Seapus」の「杯ブリット」の意味は、一つ目は音楽部門だけではなく芸術の表現部門もあるという意味の「ハイブリット」、二つ目は、その部門ごとによかったアーティストをお客さんが投票して賞を選ぶ「杯」の二つの意味がある。このフェスの開催場所は、名古屋市ではなく南知多町の南国リゾートアジアという飲食店がある敷地で行われた。名古屋市のライブハウスで行うのではなく海辺で行う理由は、普段ライブハウスに行かないという人にも足を運んでもらえるようにしたいということと、ライブハウスが一般的に思われがちな「暗い、怖い、タバコ臭い」などの闇のイメージを少しでもぬぐってもらいたいという意図があるそうだ。

ボランティアとしてしたことは、まずは事前打ち合わせを2回、その後本番を迎え、私は参加することができなかったのだが、その2週間後打ち上げも行われた。このボランティアで、他の愛知県で行われるフェスのボランティア経験がある友人ができた。その友人は、ここまで事前に打ち合わせをしてくれるフェスは初めてだと言っていた。事前の打ち合わせの際に頂いた資料にも「今回の出会いを大切にしてください。」と記述されていたが、人との繋がりを大事にしていると言ってよいのかもしれない。本番で実際にしたことは、駐車場警備、入場の受付、物販の管理、総合受付、片付けである。ボランティアスタッフとして参加して、お客さんとしてフェスティバルに来ていた時と一番違うと感じたことは、アーティストと間近に接することができたことである。しかし、彼らは本気で演奏をしに来ている。ボランティアスタッフと言っても、彼らの迷惑となる事は絶対にしてはならないと感じた。

アーティストとの距離や、人との繋がりという面でも新しい発見があった。以下の図を参照して欲しい。



まず、私の立場ではお客さんであり、ボランティアスタッフ。次に、実行委員の方で言えば、普段は社会人として働いている人が多い。そして、出演するアーティストとしても活動している人もいる。アーティストは、音楽活動一本で仕事をしている人、社会人の人と分かれる。名古屋を中心に音楽活動しているアーティストが多い。このフェスティバルの広告と宣伝を名古屋市中区新栄にスタジオを持つコミュニティラジオのMID-FMが後援していた。MID-FMは名古屋のインディーズシーンで活躍するバンドがゲスト出演したり、楽曲をパワープレイしたり、このフェスの宣伝番組をMID-FMのユーストリームスタジオを使い配信したりしている。地元の音楽を応援している傾向がある。後援している企業、アーティスト、実行委員、ボランティアスタッフ、お客さん。そこに動く人と人との距離が近いということは、このフェスティバルの一番の魅力であると思った。また、距離が近いということは、地元の音楽を活性化させるということは、誰にでも不可能なことではないと思った。

2012年12月、私は、先ほど述べたMID-FMのディレクター・アナウンサーである相羽奈穂美さんに1時間程インタビューをさせていただいた。名古屋のインディーズシーンについて業界側から長く携わっている彼女の生の声を聞いてみた。

<質問>

1. 名古屋のバンドを聴くようになったきっかけは何ですか？また、いつ頃から聴くようになりましたか？

MID-FMはもともと名古屋シティエフエムという前身局から新たにできたものであり、MID-FMのスタジオが新栄に移った

のが2008年である。新栄は、ライブハウスが集結している街であり、ライブハウスとの繋がりもありよくライブに足を運んでいた。今から5、6年前までは東京のバンドをよく聞いていた。

2. ラジオで名古屋のバンドの楽曲を多く流すようになったのはなぜですか？

地元のラジオ局（＝コミュニティ FM）という意識が強く、この街には個性があふれたバンドが多い。それを、サイマルラジオで名古屋から全世界で聴くことができる。それにより、他の地方の人に届けることもできる。やはり、地元の物良い音楽を他の地方の人にも知ってもらいたいという考えがある。

3. MID-FMでサポートをすることによって、成長したと思うバンドはありますか？

「テレポテ」、「シャビーボーイズ」、「The キャンプ」、「Bob is Sick」、「ビレッジマンズストア」など。客の立場としてライブを見るごとに、感想を彼らに伝えている。しかし、成長を手掛けるというよりは、一緒に何かをやって盛り上げていくというスタンスでいる。MID-FMで後援ライブを行ったりもする。インディーズで、自分たちがどう活動していったら良いか分からない若者に対しては、こちらがライブハウスに連絡してアポイントメントを取り、ラジオでサポートをしている。それがまた、ライブハウスに還元できて、ライブハウス側もお金が入るし、バンド側も出演することができる。ラジオでバンドとライブハウスを繋ぐ役目をしている。

4. たくさんあるバンドの楽曲の中から、パワープレイとして推す楽曲を選ぶ基準は何ですか？

MID-FMに届けられる音源のその月にリリースされる楽曲はすべて聴いている。その中で、良いと思ったものを選んでいく。名古屋のものでも、東京のものでも、全国のものを聴いている。

5. 名古屋のバンドが、東京や大阪のバンドと違うと思う所はどのような所ですか？

東京のバンドは意識が違う。人口が多くバンドの数も多いからこそ、真面目に音楽活動をしているバンドが多い。自主的にラジオやレコード会社に音源を送り、ライブに対しても真剣でお客さんにいいものを届けようとしているバンドが多い。それに対して、名古屋のバンドは、東京のような自主性のあるバンドは少ない。

やはり流行は東京から流れてくるので、大阪はあまり見ていない。しかし、大阪も名古屋と似ている感じはあるので、東京と大阪を一緒にしてはいけないと思う。

6. 東京や大阪にあって、名古屋にない音楽文化は何ですか？あったら良いと思うイベントなどはありますか？

大型フェス。ライブサーキットなどはあるが、それは、アーティストが自らお金を払って出演を申し込む形をとっているものが多い。言ってしまうと、イベントと何らかのつながりがある、出演料を払えば出演することができる。そうではなくて、イベントがバンドを見て、イベントから出演交渉をかけるフェスのほうが良いフェスだと言えると思う。東京には、そのような形をとった「エターナルロックシティ」というフェスがある。

良いレコーディング技術を持ったレコード会社、バンドに細かい配慮をしてくれるレコード会社が少ないことも挙げられる。細かい配慮というのは、ライブを組んだり積極的にCDを出したりすることである。だから、自分達でライブを企画するバンドもいる。

7. なぜ、バンドがツアーで名古屋を回らない「名古屋とばし」が起きると思いますか？

集客が難しいから。また、名古屋のお客さんはライブを割り静かに聴く傾向があり、バンド側からすれば本当に伝わっているのか伝わっていないのかが分からない。しかし、演奏が終わった後に売るCDを買いに来る人は多い。名古屋人は内弁慶なのかもしれない。

8. 最後に、名古屋の好きなおとこや嫌いなおとこを教えてください。

好きなおとこは、居心地が良いところ。市内が狭い分、動きが取りやすいところ。例えば、栄から新栄は歩いてすぐ行けるし、栄から矢場町や大須も気軽に行けて移動がしやすい。

嫌いなおとこは、内弁慶で外に出たがらない人が多いこと。自主性があまりないところ。

以上の相羽さんのお話から、名古屋のインディーズ事情が分かった。内弁慶で外にあまり出たがらないという特徴は、名古屋の人が地元で就職や結婚を済ます確率が高いことにつながるのかもしれない。それが、若者にも影響してインディーズ音楽シーンにも関係しているのではないだろうか。相羽さんは、名古屋の音楽の特徴として東京よりも自主性がないことを強く言われていた。大阪の音楽は名古屋と似ているところがあるので、東京・大阪/名古屋と東京と大阪を一緒にするのはなく、どちらかと言うと東京/名古屋・大阪のほうが音楽傾向としては合っていると言われたことに驚いた。その理由は、流行の流れ方が大阪から始めるのではなく東京から始めるものがほとんどだからだと言われた。今まで私は大阪も東京と同じように大

都市でバンドも多いと思っていたので、新しい発見だと思った。

夜遅くにインタビューに対応していただいた相羽さんに感謝したい。

4. 名古屋音楽の傾向

名古屋で活動するバンドの楽曲を集めてフリーダウンロードできるインターネットページもある。名古屋のインディーズレーベル「ONE BY ONE RECORDS」の柴山順次氏は、そのインターネットページでのインタビューに答えている。柴山氏はレーベルだけでなく、「2YOU MAGAZINE」というフリー・ペーパーを発行している

柴山氏は、名古屋の音楽シーンについて、ジャンルはパンク、ロック、歌もの、レゲエ、ヒップホップ、アイドルなど多様なジャンルが存在する。シーンが乱立しているのである。例えば、紙の付いたジャケットを来たようなパンクスの人間が、歌ものロックのライブに居ても名古屋では当たり前のことである。東京では、そのような光景が珍しいと述べている。また、名古屋のバンドの楽曲の歌詞は「名古屋が好きだ」「この街が好きだ」と歌っている楽曲が多い。名古屋の人は、名古屋の人が鳴らしている音楽が好きだから、名古屋そこにジャンルの壁はなく、ジャンルは違ってもどこかで必ず繋がっているのである。

音楽とは少し関係のない話になってしまうが、私は2012年の夏に、ある企業のインターンシップに参加した。その内容は、「名古屋市を拠点に持つ企業の資源を利用して、名古屋市の活性化には何ができるか」といったことを考えて、名古屋市役所で最終プレゼンテーションを行うというものだった。そこで、私は名古屋の食文化や名古屋人の気質について調べた。名古屋の食文化は、トーストに小倉あんをのせて食べる「小倉トースト」、本山にある「喫茶マウンテン」の風変わりなメニューなどが有名である。ごちゃごちゃに混ぜた料理が名古屋に存在する。名古屋の人の気質、例えば外の人間から「中途半端な都市だ」「変わっている」と批判を受けても、その特徴に誇りを持っているところがどこかにある。この二つのことから、私は、音楽シーンにも通じることが言えるのではないかと考えた。食文化の「ごちゃまぜメニュー」は、音楽シーンのジャンルの乱立さに通じるものがあるのかもしれない。名古屋人の気質の「地元を誇りを持つ」ということから、名古屋の人は、名古屋の人が鳴らす音楽が好きだということに通じていると考える。また名古屋は数年前からクラブシーンが活発で、HIP-HOPのヒットが多く生まれているとも言われている。SEAMO、HOME MADE 家族、Nobody knows+が有名であり、この三組に共通しているのは、東京を拠点に活動をせずに名古屋出身、在住で活躍していることが、名古屋のHIP-HOPシーンの活況を伝えることとなった。このようなクラブシーンが活発になり、インディーズアーティストが多く輩出されたことから、様々なジャンルのインディーズアーティストを育てることにつながるのではないかと考えた。また、名古屋という、東京のような大都市でなく、大阪にまでも行かない地域のサイズがそれを担っているとも言える。一度ヒットしたら、確実に広まっていくチャンスがあるのである。これまでに、地元アーティストを育てているのはラジオ局やライブハウス、その地域と述べたが、新しいコンテンツも必要だと思った。ユーストリーム配信などの番組にも注目すべきだ。サンデーフォークは新しく、インディーズバンドを紹介するインターネットサイトとして、「サンデーフォーク TANK! THE WEB ROOKIES」を立ち上げて視聴ページを作っている。

また、前章での名古屋市のコミュニティラジオ MID-FM のディレクター・アナウンサーの相羽さんのインタビューでも述べたが、相羽さんの言うように、名古屋の音楽で東京と違うところは「自主性」の違いが大きいのではないかと感じた。東京では人口が名古屋よりも多いため、もちろん活動するアーティストが多い。その中で埋もれまいとするため、東京では意識の高いアーティストが多い。ある東京のバンドが、全国すべてのコミュニティ FM に自分たちの音源を送って、自分たちのことをアピールしていたという話もあるそうだ。それだけ、若者でも真面目に音楽活動をしているということが感じられる。

5. 今後の課題

やはり、自分が音楽ジャンルのインディーズバンドが好きなので、その話が多くなってしまうこと。ジャンルは繋がっていると述べたが、その他のジャンルがどのような繋がりを持っているのかを検証する必要がある。

あとは、全国（東京や大阪）と名古屋地区の違いを検証することで、名古屋の音楽の持つ特徴を明確にする。それをしなければ内だけの話にとどまってしまうと思った。東京や大阪の音楽を知るために、何か枠組みを決めて分類化するのが良いと思った。しかし、何をどのように決めていくかは現時点では決定していない。

また、実際に名古屋で音楽をしている若者との接触が必要だと思った。ライブハウスやロックフェスティバル、イベントに密着し、多くのアーティストを見てアーティストに共通する事を探し出すこと。自分の身近な人にも名古屋のバンドに興味がある人がいるので、調査していきたい。

参考資料：

- 中島純一 (1998) 『メディアと流行の心理』 金子書房
- 永井純一 (2008) 「なぜ、ロックフェスティバルに集うのか」 南田勝也、辻泉編 『文化社会学の視座』 ミネルヴァ書房
- 西田浩 (2007) 『ロック・フェスティバル』 新潮新書
- 落合真司 (2006) 『音楽は死なない!』 青弓社
- 郷田健二 (2003) 『[インディーズ]の始め方・設け方』 ぱる出版
- TREASURE 05X <http://www.sundayfolk.com/treasure/>
- サンデーフォーク TANK! THE WEB ROOKIES <http://rookies.sundayfolk.com/>
- サカエ経済新聞 ZIP-FM 主催のライブサーキット「SAKAE SP-RING 2009」
- 各担当者が紹介するイベントのオモテ側とウラ側 <http://sakae.keizai.biz/column/6/>
- オリコンスタイル 名古屋からHIP-HOPのヒットが生まれる理由
<http://www.oricon.co.jp/news/rankmusic/46223/>
- [ototoy] 特集 名古屋音楽シーン、解剖! 『IN THE CITY THERE IS A NAGOYA MUSIC』
<http://ototoy.jp/feature/index.php/20111201>